小説◆淡海翁人
Story by Oumi Oujin
イラスト◆sabet
Illustration by sabet

勇者パーティから追い出された俺は「ティンポ師」として生きることになった

BEGINNING NOVELS

試し読み版

Kill Time Communication Presents
Beginning Novels Series

To live as “Master of Timpo”

Story by Oumi Oujin
Illustration by sabet

Contents

序章　突然の追放……005
第一章　ギルドの受付嬢、クリス……016
第二章　賢者の弟子、エメリン……035
第三章　潜伏者……088
第四章　二人のダークエルフ……134
第五章　決戦への備え……171
第六章　吸血姫テレーゼ……227
終章　何事もない朝……259
番外編　新米賢者エメリンの「賢者タイム」……269

序章　突然の追放

人族の住む領域の最北端にある街、ナローカント。
その城壁の上から、荒廃した大地を見下ろす。
数十キロ先まで続く、瘴気を吹き出す沼地。ねじくれた植物の繁茂する薮。蠢く魔物の影。
空は常に暗澹として、吹く風は冷たく、空気には僅かな毒素を含んでいる。
「ここからは魔族の支配地域となる。今までのようにはいかないだろう」
俺――賢者ディック・スティッフロッドは、仲間たちに呼びかけた。
勇者アラメアと俺を含む七人の仲間は、魔王を打倒するための旅を続けている。
その中でも最年長の俺は、一歩引いた位置からまだ未熟な勇者のサポートに徹している。
人類最強の賢者。勇者の選定者。さまざまな肩書きを持ってはいるが、ちょっと物知りで便利屋なおっさんと思ってもらえていれば充分だ。
これから向かう「魔族領域」は険しい環境だ。
環境に順応した魔物の強さもこれまでの比ではないし、物資の調達も困難だ。協力者がいる保証もない。
仲間の中で魔族領域での長距離行軍を経験しているのは俺だけなので、責任は重大だ。
今まで以上に気を引き締めていかねばならない。
俺の言葉に、アラメアが頷く。
「そうだね。街に泊まることもできないだろうし、野宿が続くのかな」
「お風呂にも入れませんね。水浴びも難しいでしょうか」
勇者アラメアが呟いた言葉に、僧侶イリナが天然気味に答える。
その年頃の娘らしい感想に、俺は思わず顔を綻ばせた。
そんなことを考える余裕があるうちは、まだ幸せだろう。
「水は貴重だ。左様な目的で無駄にはできぬ」
「水浴びは難しいでしょうけど、飲み水は切らさないように頑張りますよ！」
東国から来た剣士ウヅキはイリナを言葉少なに諌める。
そこに俺の姪で弟子でもある魔術師エメリンがフォローを入れる。
「ああ、俺もお前たちが渇くことのないように尽力しよう。この杖にかけてな」
仲間たちを安心させようと、俺は笑みを浮かべて言った。
魔力さえあれば飲み水は作れるが、問題はその配分だ。

戦闘中に魔力切れを起こせば最悪の場合、死に繋がる。
まだ未熟なエメリンには難しいかもしれない。俺が彼女の分まで補えるように、効率よく魔法を使おう。
そんなつもりで言ったのだが、仲間たちは目を丸くして沈黙した。
む？　何か変なこと言ったか？
「杖にかけて……ねえ……？」
元盗賊の吟遊詩人オリビアが、目をすがめて俺を睨んだ。
「ええと……別に、ディック殿は変な意味で言ったわけではないと思うのだが……」
女聖騎士カティナがよく分からないフォローを入れる。
いや、そもそも変な意味ってなんだよ。
「申し訳ありません。これ以上の侮辱を受けては、この旅についていくことが困難です……」
「キアラ！　君が出て行くことはない！」
「しかし……」
エルフの精霊使いキアラが悲しそうな顔で嘆息し、アラメアが彼女を引き止める。
んん？　なんでそんな話になってるんだ？
「いやいや、諸君らが過剰に気にしているだけで、きっとディック殿は全くそんなつもりは……」
「いいや、私も我慢の限界だ。それに、今回ばかりの問題ではない」
「アラメア、あんただってそうだろう？　あんたが言わないなら、あたしから言わせてもらうよ！」
「くっ……」
不穏な空気になってきた。
みんな、何をそんなに深刻そうにしているんだ。
こういうとき、女子の中に一人だけ中年のおっさんだと輪に入れなくて辛い。
「賢者ディック、すまない。あなたにはパーティを抜けてもらいたいんだ」
「は？」
「リーダーとして、これ以上の不和は見過ごせないんだ。こんなタイミングでの勧告になってしまって、申し訳ないとは思っている」
「え？　俺、何かやったか？」
アラメアの言葉に、頭が真っ白になった。
え？　仲間から外れろって？
散々、魔族領域は危険だと言っていたのに、なんで態々突入寸前で賢者を外すんだ？
「何かヤった後じゃ遅いから言ってんだよ！」
「オリビア、何の話だよ……お前さ、他の仲間にも分かるように、はっきり言ってくれないと」

「ディックさん！　これ以上はやめてください！」
イリナが真っ赤になって大声を出した。控えめな彼女にしては珍しいことだ。
「師匠、実は、何度も師匠以外で話し合ったことなんです」
「すまない。ディック殿、どうにかあなたが抜けないで済む方法を見つけたかったのだが……」
エメリンとカティナがすまなそうに言う。
「賢者ディック、分かっていると思うが、このパーティで男はあなた一人だけなんだ」
「ああ、まあ、そうだな」
「他は皆、若い女性ばかりだ。それに、私はともかく、皆容姿に優れている。こちらから言われる前に自分で考えて欲しかったんだけどな」
「いや、アラメア。お前だって美人だろ」
「くっ……そういうことは言わなくてもいいんだ！」
アラメアは俺から目を逸らす。
ぽつりとイリナが「セクハラ……」と呟くのが聞こえる。
「ディックさん……どうせ、私たちを淫らな目で見ているのでしょう？　知っているんですよ。人間の男は、いつも、こ、股間を膨らまし、女をお、おか……いやらしいことをしたいと思っているって、人族の書物に書いてありましたから……」
「いや、それ、読んだ本が偏りすぎだぞ」
おぞましげに身を震わせるキアラにつっこむが、答えてもくれない。
「実際にさ、あんた、あたしたちを見て勃起してるんだろ。コソコソ用足しに行くフリをして抜いてるのを、この目で見たんだからね」
「いや、見るなよ。っていうか、それ生理現象だから」
「天使の法衣とか、水精霊の羽衣とか、ドライアドローブみたいな、スケスケだったり、布地が少ない服を装備した直後にだよ。何をオカズにしてるのか丸分かりなんだよ」
「そりゃたまたまだろ」
ひどい邪推をされた。
むしろ俺はオリビアが他人のオナニーを覗くような奴だってことがショックだよ。
「あと、あんた街に着くたびに娼館に行ってたよね」
「そりゃあ行くこともあるだろ。それにしたって毎回じゃねえよ」
「賢者ともあろうものが……」
「……クズ」
「下衆め」
「師匠……」
「ディック殿……それならそうと、言ってくれれば……」

「穢らわしい。穢らわしい。穢らわしい」
自慰も娼婦もダメって、どうすりゃいいんだ。
仲間内で間違いが起こらないように、娼婦や行きずりの女や自慰で済ますのは悪いことじゃないだろ。
誰だって、仲間同士の色恋沙汰でギスギスしたくはないはずだ。
「ディック殿、宿ではいつもエメリン殿と同室だったな」
「そりゃあ、まあ、家族だし」
「お主の言う家族とは、毎夜身体を弄って嬌声を上げさせる関係のことか」
「ウヅキさん、だからそれは、師匠が私の魔力回路を強化するために……」
「エメリン。そう言うように口止めされているんだろう？無理をするんじゃない」
「だから、それも誤解なんです！」
エメリンへの魔力調律に関しては、これまでも説明したはずだったのに、この反応だ。
魔法使いの師弟としては普通の修練法だというのに。
「すまない……万が一、本当にディック殿が私たちに欲情していたとしても、私一人で相手をするから大丈夫だと説得したのだが……」
「カティナ……それ、かなり斜め上の発想だよな」
「カティナさん！　何度も言っているけど、あなたが犠牲になる必要はないんだ！」
散々な言われようだ。まさか自分が誰彼構わず発情する猿だと思われていたなんて。
俺だって性欲はあるが、相手と時と場所くらいは考えている。それこそ仲間といる間は『賢者タイム』でいられるように努力してきたのに。
「どうか分かって欲しい。決して、あなたの賢者としての能力を疑っているわけじゃない」
「うーん……でも、人格は疑ってるってことか」
「ああ、すまない。その通りだ」
「……うん」
「無論、一切信頼に値せぬ」
「人間の男なんて、信じられるわけないのよ……」
「っていうか、キモいんだよ」
最後に放たれたオリビアの一言が効いた。
不意打ちに言葉のナイフで刺してきた。さすが元盗賊。クリティカル率高いな。
「正直な話、襲われるかもしれないと思ったことは一度や二度ではないんだ」
アラメアは切実そうな表情で言った。
「魔族の領域で野宿なんてしたら、誰も助けてはくれない。

あなたがもし仲間たちの生還を盾に身体を要求してきたら、私たちは断ることができないだろう」
「そんなことはしない」
「ああ、おそらくしないだろう。今までもしなかったし。でも百パーセントじゃない。これからのことは分からない。だから、みんな恐れているんだ」
俺は言葉に詰まった。
アラメアだけじゃなく、それが仲間たちの総意なんだな。
否定や反論もできたはずだが、それ以前に俺は心が折られていた。
「賢者ディック。あなたは強すぎる。あなたは、私たちの生殺与奪の権を握っているんだ。それが私たちにとって、どういう意味を持つのか、どうか考えて欲しい」
真摯に、アラメアは俺に呼びかけた。
俺はアラメアを勇者として見出した選定者だった。
俺はエメリンの叔父で、師匠だった。
俺はパーティの要で、問題の解決役だった。
俺は、みんなの仲間のつもりだった。
今まで、自分が恐れられていたなんて、考えたこともなかった。
アラメアと出会って今までの出来事が脳裏に去来する。
彼女が聖剣を抜いた場に立ち会い、勇者であると認定したのが全ての始まりだった。
身寄りのない彼女が、各国の王侯貴族の操り人形にされないよう、選定者として後ろ楯になった。
俺が中心になって、各国の協力を取り付け、勇者を支援するシステムを作った。
人類最強という箔が、彼女を守ると信じていた。
エメリンを育てる傍ら、勇者の教育にも力を入れた。
俺が直接剣の技を教えることはなかったが、自ら世界中に足を運んで、彼女の剣の教師として、多種多様な剣術の使い手を招聘した。
教師以外にも、旅に必要な多くの協力者と顔を繋いだ。
今いる仲間は、ほとんどが俺が自ら各勢力に頭を下げて、勇者を補佐するために集めた人材だった。
自ら追いつめられる布石を置いていたのだと考えると、どこか滑稽にも感じる。
「分かった。アラメア、みんな、今まで世話になったな」
「理解してくれて助かるよ。賢者ディック、こちらこそ、今までありがとう。あなたへの恩は決して忘れない」
勇者アラメアが俺に頭を下げる。
やれやれ、何度も見てきたアラメアのつむじも、これで見納めか。
そんな冗談が脳裏に去来する。

反射的に彼女の頭を撫でようとして、手を止めた。
こういうのも、セクハラかもしれんな。
「とりあえず、俺は荷物をまとめて、別の宿を取る。宿が決まったらまた連絡する。せめて出発くらいは見送らせてくれ」
そう言い残し、踵を返した。
背後で何やら言い争うのが聞こえる。
去り際までそんな調子では、心配になってしまう。
結局、俺を追い出すという決定は覆らなかったようで、誰も引き止めたり、追いかけてきたりはしなかった。

◇　◇　◇

その後、適当に別の宿を取ると、元仲間が泊まっている宿に伝言を残した。
荷物を解いてひと心地ついたところで、羊皮紙とペンを取り出す。
過去、何度か魔族領域を旅した経験から、諸注意をメモしておくためだ。軽い忠告だけにするはずが、最終的には本にできそうな厚さになってしまった。
やはり魔族領域はヤバい。あいつらが俺なしであそこに踏み込むんだと思うと、心配になってくる。

俺は仲間たちをエロい目で見るより、親戚のおっさんのつもりで見守る方が性に合ってるようだ。
紙束に簡単な表紙をつけて紐で綴じていると、ノックの音が聞こえた。
「失礼します、師匠」
入ってきたのは、俺の可愛い天使だった。
もとい、姪のエメリンだった。
長い黒髪のお下げ、温かみのあるこげ茶色の瞳、小柄な体躯を魔女らしい衣装で包んだ、可愛らしい少女。
殺風景だった部屋も、彼女が入ってきただけで、どこか華やいだような気がする。
彼女には父親がおらず、母親である俺の姉もふらふらと世界中を飛び回っている。
だから、叔父であり師匠である俺が彼女の親代わりでもあった。
しかし、パーティを追い出された今、その役目を全うすることは難しそうだ。むしろそろそろ俺も子離れというか、姪離れするべきなのだろうか。
「一人だけで来て大丈夫か？」
「師匠が悪い人じゃないのは、私が一番知ってますから！」
頭を撫でてやると、俺に抱きついてきた。
やれやれ、いつまでも子供だな。

「ちょうどいい。さっきできたところだ」
「『魔族領域の手引書』……これは⁉」
「未経験でいきなり突っ込むのは危険だからな。少しでも知識があった方がいい。俺はお前たちに死んで欲しくないからな」
「ありがとうございます、師匠」
エメリンは花が綻ぶようににっこり笑う。
化粧っけがなく、野暮ったいお下げ、地味なローブ姿。それでも笑顔になるだけで、数割増し可愛く見える。
家族としての贔屓目もあるが、エメリンは美人に育っている。
彼女の父親には会ったことがないが、美人の母親に似てくれてよかった。
「俺はこれから、何もしてやれんからな……」
「師匠……」
エメリンが不安そうな顔になる。
「大丈夫だ。お前は優秀な弟子だ。魔法能力も順調に育っているし、賢くて機転が利く。あと足りないのは経験くらいだ。死なないことにだけ気をつけて、何度もこの街に戻ってきなさい。助言くらいはしてやるさ」
「はい、師匠」
「そうだ。お前にやるものがある」
「はい？」
「服を全部脱いで、そこのベッドにうつ伏せになりなさい」
「えっ⁉　ええええええっ⁉」
エメリンは真っ赤になり、恥ずかしそうに躊躇する。
いや、オムツ換えてた頃から見てるんだから、今更恥ずかしがるなよ。
何度か促すと、彼女は酷く緊張した面持ちで全裸になり、俺のベッドに寝そべった。
「あ、あの……ふつつかものですが……」
「それは知ってる」
「し、師匠……できれば、優しくしてください」
「どうかな。俺も初めてだから、痛くないように入れられるかは分からん」
「ひうっ⁉　わ、わかりました……でも相手が師匠なら、ディックおじさまなら、大丈夫です……」
エメリンには何度も魔力譲渡やら整流やら、色々な魔力調律法を施してきた。しかし、さすがに、魔力の完全継承はやったことがないからな。
というか、大半の師匠ってもんは一生に一回やるかどうかくらいだろう。
エメリンの腰——魔力回路の重要経路が集中する箇所に触れた。彼女はびくりと身を震わせる。

「おじさま……」
「安心して俺に全部任せてればいい。俺の全てを、ここに注ぎ込んでやる」
「はい……おじさまの、いっぱい、中にください」
エメリンはぎゅっと閉じていた脚をわずかに開く。
ふむ、緊張が少しほぐれたか。
強ばっていた魔力の流れがスムーズになっている。この方が魔力が馴染みやすいから、ちょうどよい。
時間がかかりそうだし、俺ももう少し楽な姿勢でやるとするか。
俺はエメリンの脚の間に座り、腰を両手でつかむ。
「いいか、入れるぞ？」
「あ、あの、おじさま！」
「うん？」
「私、おじさまのこと、ずっと、ずっと好きでした！」
「うん、そうか。そりゃあ、ありがとう」
「えへへ……あの、もう大丈夫ですから、どうか一思いにやってください」
ふむ？
まあ、俺は賢者ではなくなるしな。エメリンにとっての大好きな師匠ではいられなくなる。それは少し寂しい気もするな。
だが、これが師匠としてできる最後の仕事だ。ちゃんとやり遂げなくては。
「あっ！　あ……あれ？　なに、これ……なにか、入ってくる……」
俺はエメリンに自分の持つ魔力を注ぎ込む。
いや、魔力だけじゃない。魔力に乗せて、経験や知識、呪文のレパートリー、継承可能な特殊能力の全てを与える。
「あ……あぅ……おじさま……どうして、こんな……」
二十分か、三十分か。そのくらいで全てが終わった。
俺は賢者としてのレベルやスキル、全ての能力を失った。
変換の際に多少の目減りはしたが、それらはエメリンの中に生きている。
魔法での感知はできないが、肌で感じる魔力の流れから考えて、エメリンは一気にレベルが30ほど上がったくらいの魔法能力が上昇したようだ。
「よかった。ちゃんと成功したみたいだ」
「えっ、まだ性交してな……あ、いえ、なんでもないです。すいません。少し勘違いしてました」
「使いこなせるか？」
「あっ、はい……えっと……まだ少しぎこちないですね」
「毎日基礎練習を繰り返していれば、一週間ほどで馴染むはずだ。そこからは、自分で成長していくんだぞ」

ベッドの上に正座したエメリンの頭を撫でてやる。
彼女の目には涙が浮かんでいた。
「師匠……これからは、師匠がそばにいないから、だから、私に全部くれたんですね……」
「ああ、そうだ。本当なら死期が迫ってから行う術だが、まあ、それ以前にお前が魔族領域でくたばったら元も子もないからな」
「本当は、私、ずっと師匠といたかったのに、離ればなれなんて……力なんていらないから、師匠についてきて欲しかった……」
「離ればなれじゃないぞ。俺はずっとお前のここにいる」
そう言って、エメリンの下腹部を撫でる。膨大な魔力が渦を巻いている。魔力ゼロになった俺にも分かるほど強い力のうねりだ。
彼女は俺の手を自分の両手で包み込み、目を閉じて魔力の流れを感知する。
「俺の教えと、俺の力が、ずっとお前と一緒にいる。それに、分からないことがあったらいつでも会いにくればいい」
「……はい」
しばらくの間そうしていたが、エメリンは服を着て仲間のいる宿に帰ることにした。あまり長居しても仲間が心配するだろうからな。
「そう言えば師匠は、これからどうするんですか？」
「うーん、まあ、冒険者ギルドで再登録して新しいクラスでも取って、再就職かな」
「大変ですね……私のせいで……」
「気にするな。腐っても元大賢者だぞ。すぐに強くなって、またお前らに追いつくかもしれんぞ」
「あはは、そうだといいですね」
彼女は去り際にもう一度振り返る。
「あの、師匠にとって私はまだ子供ですか？」
「ん？　まあ、そろそろ一人前だが、そうだな……たぶんずっと我が子みたいに思ってるぞ」
「そう……ですか……」
「うん？」
「なんでもないです」
彼女は来た時のように、俺に抱きついた。
ただのハグかと思ったら、なぜか彼女は唇を重ねてきた。
「行ってきます」
「ああ、行ってこい。死ぬなよ」
エメリンは魔法使いの帽子を頭に乗せ、顔を隠すようにして去って行く。
しかし、最後のキス、頬とか額にして欲しかった。
まだ口臭とかは酷くないと思うが、あまり大事な姪に不

快な思いはさせたくない。
ふとベッドに目を落とすと、シーツが濡れていた。
汗か？　いや、それにしては多い。
気づかないうちに飲み物でもこぼしてたのかな。
こんなとこに寝そべっていたなら、エメリンはさぞ気持ち悪い思いをしただろう。
そこまで考えて、粘液の出所について、一つの可能性に思い当たる。
俺がこぼしたのではなくて、エメリンがこぼしたのだとしたら？
「いや、まさかな。あいつはまだ子供だぞ。それに、どこにエロい気持ちになる要素があるって言うんだ」
自分の唐突な妄想を追い出そうと頭を振る。
考えすぎだ。
仮にエメリンのだとしても、きっと汗だ。
魔力を大量に受け取ると発熱することがあるし、きっとそれが原因だ。
俺はそう結論づけて、思索を打ち切った。
エメリンが去った部屋には、どことなく大人っぽい残り香が漂っていた。

第一章　ギルドの受付嬢、クリス

人族の住む領域と魔族領域との境界にある街、ナローカント。

その冒険者ギルド支部に、俺はやってきていた。

常に人手不足のこの街では、昼過ぎの冒険者ギルドにはほとんど人がいない。

冒険者は依頼や討伐で出払っており、職員は全支部平均よりも六割増しの仕事量をこなすために、各地を駆けずり回っている。

たまたま今日ギルドに詰めていたのは、何度か担当してもらったことのある、クリスという受付嬢だ。

金髪碧眼（きがん）、北国育ち特有の雪のように白い肌。

受付嬢にはなぜだか豊かな胸の女が採用されやすいが、彼女の胸はその中でも特に大きかった。

確か、受付嬢の中では一番人気だとか聞いたことがある。

担当してもらったときに聡明で働き者の印象を受けたので、人気なのも納得だ。

「ディック様じゃないですか！　いらっしゃいませ、本日は何のご用件で？」

「いや、クリス。様はつけなくていい」

「えっ、私の名前、覚えてくださっていたんですか⁉」

「可愛い子の名前は覚えやすいもんさ」

クリスは顔を真っ赤にする。

おっと、これもセクハラかもしれんな。彼女には悪いことをしてしまった。

「今日は、再登録のために来た」

「はい？　冒険者証の紛失ですか？」

「いや、賢者じゃなくなったから、新たなクラスをもらわなきゃいけない」

「えっ⁉」

クラスは運命的に与えられる場合と、国やギルドの管理する魔法道具で得る場合がある。

前者は勇者や賢者など、特殊なクラスが与えられることが多い。

後者は国なら騎士に採用されたとき、ギルドなら冒険者登録したときに得る。

元盗賊のオリビアなどのように、自主的に再登録してクラスを変える場合もあるが、普通は賢者がクラス変更することはないはずだ。

まあ、そりゃあ驚くわな。

「全ての能力を弟子に譲る魔法があるんだ。エメリンに全部託して、俺は賢者を引退したってわけだ」

「そうなんですか、それは何と言うか、残念な……」
「まあ、これからは弟子が頑張るからな。残念でもないさ」
なぜかクリスは少し気落ちした様子で登録の準備をする。
うーん、若い女の考えることはよく分からんなあ。
「身元の保証はもはや聞くまでもないですし、保証金は免除で大丈夫です」
「おう」
「こちらの職能盤に手を乗せてください」
言われた通りに、黒い円盤の上に手を乗せる。
各支部に置かれた職能盤は、冒険者ギルド本部に設置されたSSSランクアーティファクトに接続されている。
そのアーティファクトの能力で登録者の才能を引き出し、クラスを与える仕組みになっているのだ。
ドクン――
心臓が一際強く鼓動を刻んだ。
全身の血流が、どこか力強く感じられる。
力が湧いてくる。
今までの賢者の力とは全く違う力だ。
魔力ではない。闘気に近いが少し異なっている。強いて言うなら血流が関係していそうな感じだ。
うーん、前衛かな。
前衛だと完全に賢者と勝手が違うから、心配だな。
そんなことを考えていると、クリスがどこかソワソワしたような感じになっていた。
トイレか？
俺のことは気にせず行ってきてもいいんだが……それを指摘するのはセクハラかなあ。
彼女は俺を見て、ぺろりと唇を舐めた。どことなく熱っぽい感じの視線だ。
「お待たせしました。これが新しいギルド証になります」
「ありがとう」
ギルド証を受け取り、真っ先にクラス欄を見る。そこには見たことのないクラスが書かれていた。
ティンポ師。
ん？　なんぞこれ。
二度見しても、やはりティンポ師だった。
ティンポ師？　チンポで戦うのか？
意味が分からん。
とりあえず、ステータスを開いてみた。
ギルド証の表面に書かれたクラスやギルドランクと違い、ステータスは本人だけが見られるプライベートな機能だ。
所持スキルや取得可能なスキルなどが、ギルド証を通じて脳内に表示されるのだ。

《ディック・スティッフロッド》
【クラス】
　ティンポ師：レベル１　（残りスキルポイント：３）
【所持スキル】
　［男の魅力：レベル１］［精力増大：レベル１］
【取得可能スキル】
　［経験値変換／性］［性技習熟］

うん。分からん。
とりあえずこれ、戦闘職じゃなさそうだな。経験値変換スキルがあることから、それが分かる。
例えば経験値変換／冶金（やきん）がある鍛冶師は、戦わなくても仕事しているだけでレベルが上がる。
まあ、本来モンスターと戦うのと鍛冶の腕は関係ないし、当然と言えば当然だけどな。
それはともかく、精力とか鍛えてどうするんだ。
花街で無双すんのか？　いや、できたとしても、だからなんなんだ。
首を捻（ひね）っていると、クリスがギルド証を覗き込んできた。
このクラス名を見られるのは、少し、いや、かなり恥ずかしいな。
「ティ……えっと、見たことのないクラスですね」
「あー、すまん。存在そのものがセクハラみたいなクラスになっちまった」
「いえ！　そんなことはありません。レアクラスに出会えるなんて、とても運がいいと思いますよ」
物は言いようだな。
確かに、悪い方にばっかり考えてもしょうがないか。
「ええっと、ギルドの記録を確認したところ、ティンポ師はまだ発見されていないクラスみたいですね」
「そうか。まあ、こんなクラスがたくさんいても仕方ないもんな」
「ディック様が世界で初めてのティンポ師ということになりますね」
いや、若いお嬢さんがあんまりティンポティンポと連呼するもんじゃない。
こっちが恥ずかしくなる。
「そうするとですね……冒険者ギルドには、未確認クラスを検証する責任があるんですよね」
「検証ねえ。レポートでも出せばいいのか……そいつは勘弁して欲しいけどな」
「いえ、レポートはこちらで書きますし、必要でしたら所持者は匿名にしておきますよ」
「それはありがたい」

「ギルド証を見れば一目瞭然ですし、偽装くらいはかけておきましょう」
クリスはいくつかの魔法道具を使って、何らかの処理をする。
返ってきたギルド証は【クラス】格闘家：レベル1になっていた。
これなら武器を持ってなくても、魔力が小さくても違和感はないな。いいチョイスだ。
ある意味、ベッド専門の格闘家と考えれば、間違ってもいないところが悩ましい。
「ありがとう。これで少なくとも関所で取り調べされることはないだろうな」
「えっ⁉　他の街へ向かわれるんですか⁉」
「いや、その予定はないけど。まあ、例えばの話だよ」
「そうですか。よかった」
クリスはあからさまにほっとしたような顔をする。
うーん、何がよかったんだろう。
「いえ、ほら、未確認クラスの取得に立ち会った職員としては、見届ける義務がありますし」
「無理せず他の奴に引き継いでもいいんだぞ」
「そんな勿体(もったい)ない……いえ、私のキャリアにもなりますし！」
「まあ、少しでも役に立つならいいけどな」
ティンポ師を研究して得られるキャリアつってもな。
この子に変なあだ名がつかないことを祈りたいところだ。
「あの、ディック様？」
「うん？」
「この後、何かご予定は？」
「いや、特に何もないかな……戦闘職だったら色々準備しようかと思ってたけど、そもそもまだ理解が追いついてない状態だし」
「そうですか。それはよかった」
クリスは頷いて、こくりと喉を鳴らす。
彼女の視線は俺の顔から下に動き、もう一度顔に戻ってきた。
「あの、もしディック様がよろしければですが、これから未確認クラスの検証をしてみませんか？」
「検証？」
「はい。実際にスキルやクラスの能力がどう働くのかを、早めに理解しておいた方がいいかと思いますよ」
「まあ、確かにそうだな。でも、いいのか？　受付を空けちゃっても」
「ええ、遅番の子が出勤してくるまで、誰も来ないと思いますので……」
言葉を切り、彼女は俺の手を握って上目遣いに見つめる。

「……たっぷり、時間はあるかと」
俺は少し考えた。
まあ、彼女が言うように検証はしておいた方がいい。
女を買って検証してもいいが、そうするとクリスに説明する手間が増える。
直接確認してもらう方が楽ではあるのだ。
「そうだな。お願いしようか」
「ありがとうございます、ディック様。それでは仮眠室の方に」
彼女は自分の腕を俺の腕に絡め、しなだれかかるようにしながら俺を誘導する。
薄めの香水の匂いに混じって、彼女の汗の匂いがした。
平均よりも大きめの膨らみが、俺の腕を挟み込むように包んでいる。
どんな検証をするのか聞く前だというのに、俺のチンポは期待で半勃起していた。
やれやれ、今から期待しすぎだぞ。
とは言え、冒険者内一番人気の美人受付嬢にそれっぽく誘われて期待するなというのも難しい。
仲間の目も気にしなくてよくなったことだし、積極的に狙っていくのも悪くないだろう。

◇　◇　◇

受付嬢クリスに連れられて、ギルド庁舎内の仮眠室へとやってきた。
一人用ベッドとサイドテーブルと小さなクローゼットがあるだけの、シンプルな部屋だ。
意外に掃除が行き届いていて、清潔そうだ。
まあ、冒険者は身なりに気を遣わないが、ギルド職員は割と身ぎれいにしてるし、不思議ではないか。
クリスはサイドテーブルから紙束とペンを置き、ベッドに腰掛けて振り返る。
どことなく頬が上気しているような気がする。
「さあ、検証を始めましょうか」
「楽しそうだな」
「えっ!?　ええ、上手く行けば昇進とかできそうですし、元々ディック様のことは気になってましたし……」
意味深な言い方で期待しそうになるが、確かに勇者パーティの賢者はギルド職員としては気になるよな。
俺もクリスの横に腰掛ける。彼女はチラチラと俺の股間の辺りを見ながら、小さく咳払いした。
「ええと、ではまず、初期所持スキルと取得可能スキルについて……」

「所持が男の魅力、精力増大。取得可能が経験値変換と性技習熟だな」
地味にスキル名を口に出すのが恥ずかしいんだが。
「はい。初期スキル二つというのは、当たりクラスと同一フォーマットですね」
「当たりとは思えないんだがな。あと、初期スキルポイントが3だな」
「3ポイントですって⁉　それはすごい！」
すごいのか。よく分からん。
賢者は初期スキル三つに、スキルポイント5だったからなあ。
「スキルの効果は分かりますか？」
「表示されてないな。レベルが上がると説明が解放されていくタイプだと思うぞ。勇者がそんな形式だったらしい」
「なるほど……」
クリスは頷いてメモしていく。
綺麗な字だな。さすが受付嬢をやってるだけはある。
指も細くて綺麗で、爪の形も整っている。農婦でも冒険者でもない、事務作業を行う女の手だ。
肌も日焼けしておらず、キメが細かい。
長い金髪を結い上げていて、うなじが見えるのがなかなかそそる。
「うーん、男の魅力の方はなんとなく分かるんですけど」
「ほう。どんな効果？」
「ひゃっ⁉　み、耳はダメですっ！」
「おう、悪かった」
知らないうちに近づきすぎていた。耳に息がかかったのがまずかったらしい。
彼女は耳を真っ赤にして続ける。
「クラスを取得したときに、ディック様がなんだかぐっと魅力的になった気がしたんです」
「んん？　別に顔は変わってないと思うがな」
「いえ、顔とかじゃなくて、雰囲気です」
ふーむ。俺は普通オブ普通な見た目だから、雰囲気が変わったって大した違いはないと思うけどな。
「あとは精力増大はたぶん体力が上がって、性技習熟は器用になるんだろうってのはなんとなく分かる」
「そうですね」
「経験値変換は早めに取得しておいた方がよさそうだな。1ポイント振っておくぞ」
「はい。スキル振りはどうぞご自由に」
「いやまあ、共同研究みたいなもんだから、了解ぐらいは得ないとな」
そう言いながら、ポイントを振った。

うん、体感的な違いは全くない。この辺は普通の経験値変換スキルだな。
「さて、あとはどうするかな。なんとなく体感で効果が分かるなら、試しに男の魅力を上げてみるか」
「はい。それもいいかと思います」
1ポイント追加して、男の魅力をレベル2にしてみた。
俺自身は何も変化した気がしない。
しかし、ポイントを入れた瞬間にクリスが下腹部を押さえて俯いた。
「っ、くぅ～～～～～～～～～～ッ!?」
「どうした？　痛いのか？」
「い、いえ、ぜんぜん、痛くは……、ないんですが……」
呼吸が荒い。顔ももはや全体的に真っ赤だ。
「体調が悪いなら、医務室に連れて行くぞ」
「いえ……そんな……」
「元賢者とは言え、少しは体を鍛えている。お前一人くらいは抱えていけるぞ」
「だ、だめです！　そんなことをしたら、おかしくなってしまいますので！」
全力で拒否された。
うーん、分からんな。
しかし接近した異性の体調が悪くなるなら、女性型魔物専門のハンターになれなくもないかもな。
大発生するような女性型魔物は聞いたことがないので、相変わらず就職先としては微妙だが。
「本人に自覚がないのが厄介ですね……」
「まあ、詳しく教えてもらえないと分かりようがないな」
「ま、まあ、その……説明は後にするとして」
「なぜだ」
俺のツッコミをスルーし、クリスは右手にペンを持ったまま左手を俺の太腿に置く。
どこか遠慮気味に撫でさすった後、彼女は俺の硬くなりかけのイチモツに手を触れさせた。
「あ……」
「いや、あじゃないだろ。これも何かの検証か？」
「ええ、その、ティンポ師という名前のクラスですので、クラスに就く前と後で、チ……、おチ……、だ、男性器の大きさとかに違いはないかなーと」
クリスは俺と目を合わせず、早口に言った。
クラス名はさらっと言えるのに、チンポは言えないってどういうことだよ。連呼して慣れたのかもしれんけど。
「うーん、まだフルじゃないから分からんな」
「え……まだ大きくなるんですか？」
「いや、普通に考えてそうだろ」

「そんなこと言われても、その……私は触るのも見るのも初めてですので……」
恥ずかしそうに言いながら、クリスはズボンの上から半勃起したチンポを擦る。
刺激そのものは単調だが、可愛い女の子が撫でてくれているせいか、俺のそこはむくむくと膨張していく。
しかし、そういう経験がないのに、こんなクラスの検証に付き合って大丈夫なのか。クリスも成人はしているみたいだから、自己責任なのかもしれないが。
これ以上は苦しいというところで、俺はベルトを解き、ズボンからチンポを取り出す。
勢い良く飛び出したチンポに、クリスは驚いて手を引っ込める。
俺は彼女の左手を握って亀頭に触れさせた。
「転職前ならこれが全開だったが、今ならもう少しいけそうだ」
「なんだか、ヌルヌルしていますけど」
「クリスの手が気持ちいいからな」
「そ、そうですか……？」
褒め言葉を囁いてやると、彼女はごくりと唾を呑み、舌なめずりした。
クリスは先走りを手のひらで塗り付けるようにして亀頭を擦る。左手は忙しなく動いていたが、先ほどからペンを握る右手が動いていない。
「検証は？」
「あ、はい……その、初めてなので比較はできないですが、すごく大きくて硬くて熱いんですね」
「まあ、もとのよりはな」
「こんなに大きいのが、は、入るんでしょうか……」
「どこに入れたいんだ？」
「え、あ……」
クリスは俺の下腹部と自分の下腹部を交互に見つめる。
なんだか少し押せばヤれそうだな。
まあ、何にしても経験値変換の検証は必要だから、誰かとヤる必要はあるのだし、手間は省けるか。
据え膳は身内以外なら遠慮なく食う主義だ。それが美人なら尚更だ。
「入れるなら準備しないとな」
「きゃっ⁉」
俺はクリスを持ち上げ、自分の上に座らせた。結構軽いな。ちゃんと飯食ってるのか。
彼女のスカートをめくり上げ、太腿の間からチンポが出るようにした。クリスが身をよじると、下着越しの柔肉が剛直に押し付けられる。

「そのまま続けろ。俺もクリスの準備をしてやるよ」
「ひぅっ⁉　は、はいっ！」
下着の上からクリスをいじめる。
ついでに性技習熟を取得しレベル1にしてみる。スキルを取った後では、手探りでも下着越しなのにクリトリスの位置がはっきり感知できた。
試しに乳首もつまんでみたが、一発でヒットした。
なかなか便利な……だが、他に使いどころのなさそうな微妙なスキルだな。
「んっ！　んんっ！　だ、だめです、乳首はぁ……っ⁉　なんで、こんな、気持ちいいとこばっかりっ⁉」
位置の把握だけではなく、力加減やリズムも的確になっているようだ。
処女相手は初めてじゃないが、こんな短時間で乱れすぎなんじゃないかと思うような反応だ。
ペンが床に転がり、紙束が崩れて落ちた。
俺の与える快楽から逃れようとするかのように、クリスは両手で俺のチンポを扱く。
教えてもいないのに、片手で亀頭を、もう片方で竿を、緩急をつけて刺激する。
「なかなか覚えがいい。ご褒美だ」
「んんんっ⁉　あぁっ！　ひぁあああぁぁぁぁぁぁぁぁんッ⁉」
下着をずらしてクリトリスへの直接刺激。
それと同時に強めに乳首をつねり、弱点らしい耳へ噛み付くようなキス。
クリスはチンポを握ったまま、俺の上で悶えて果てた。
痙攣する淫口から、とろりとした蜜が俺のチンポの上に垂れてくる。
口を半開きにして涎を垂らしていたので、舐めとり、そのまま口内を舌で犯してやった。
クリスはわずかに嫌がりながらも、どこか嬉しそうだ。
なんとなく、彼女は痛い方が好みのような雰囲気だ。それと、命令されたり無理矢理されたり。
軽度のマゾ傾向を感じる。
俺はクリスをベッドに寝かせた。
彼女はどこか期待するかのような表情で見上げる。
俺は彼女の愛液で濡れた赤黒いチンポを見せつけながら訊ねる。
「精力増大の検証がまだだが、続けてもいいか？」
「は、はい」
「じゃあ、性技習熟レベル1とレベル2の違いを、お前の腹で検証することにしようか。クリス、股を開け」
「承知しました、ディック様」

強めの口調で命令すると、彼女は自ら脚を開き、太腿を抱えた。
待ちわびるように愛欲の涎を垂らす純潔の唇に、俺ははち切れんばかりに勃起したチンポを押し付けた。
チンポでクリスのマ○コの入り口をぴたぴたと軽く叩く。
性技習熟による補正か、クリスがわずかな痛みとともに快楽と期待を感じているのが手に取るように分かる。
少しそうやって焦らした後、俺はクリスが気を抜いた隙を狙って一気に貫く。
初めての瞬間を踏みにじるつもりで、彼女が欲したタイミングから敢えてずらした。
ささやかな抵抗を軽々とブチ破り、未通の柔肉をこじ開ける。狭い膣道で俺をギチギチに締め付けながら、クリスは苦痛に悶えた。
「うぐっ⁉　くぅ～～～～～～～ッ⁉　お、おおきい……痛っ……」
「少し狭いが、なかなか具合のいいマ○コだな」
「っ、ぐ……ありがとうございます、ディック様……」
俺はクリスの腰を押さえつけ、ゆっくりと腰を引いた。
処女の証である鮮血が、俺のチンポを彩っている。
別に初物に拘りがあるわけじゃないが、征服感があるのと、他のチンポに触れていない清潔な感じは気持ちがいい。
「処女だったか」
「は、はい」
「じゃあ、女にしてやったんだから、俺にお礼を言わないとな」
「はい、私の処女を奪ってくれてありがとうございます、ディック様……」
クリスは痛みをこらえて笑顔を作って言った。
なかなか従順ないい子だ。支配されること、蹂躙されることが好きそうなのも好感が持てる。
「今度は全部入れてやるから、俺の形をしっかり覚えろよ」
「えっ？　あぐっ！　かは……っ！」
勢いをつけて腰を叩き付け、チンポを根元まで埋めた。
クリスの子宮を無理矢理押し上げる。
彼女の口から、チンポで絞り出されたように絶え絶えな吐息がこぼれる。爪を立てるように太腿を握りしめ、彼女は肉穴を穿たれる苦痛に耐えていた。
そのままチンポで型をとるようなつもりで、密着したまま固定する。
俺の袋を伝って、クリスの処女血が垂れ落ちた。
彼女は相当な苦痛を感じているらしく、口をだらしなく開いて苦しげな浅い呼吸を繰り返している。膣肉はビクビ

クと痙攣しながら俺を締め上げていた。
苦痛に慣れてきた頃に、また膣壁を抉るように動いてやると、面白いように哭いた。そのくせ、だんだん俺を歓迎するように絡み付いてくるのだから、良い雌穴だ。
まだ快楽には至っていないが、子宮口を突くたびに苦痛とは別の反応がある。ここは特に開発し甲斐がありそうだ。
「い、ぎっ⁉　くっ、かは……ぁ、っ」
「まだ痛いだろうが、お前のマ〇コは俺のチンポがご主人様だって分かってきたみたいだぞ。優秀なマ〇コだな」
「ぐっ、っ……、ディック様に、お褒めいただいて、っ！　うれしいですっ！」
「いいオナホに産んでもらってよかったな。親に感謝しろ」
「あぅ……承知しました……お、お母さん、クリスを……はうっ！　優秀な、オナホに、産んでくれて、ふくぅっ、あ、ありがとう！」
酷い台詞を言わせるたびに、クリスは嫌悪感を覚えながらも服従し、背徳的な快楽を感じている。
処女のくせに、なかなか順応の早いマゾだ。
俺はボタンを引きちぎるように胸元を開かせる。ギルド職員の清楚な制服に拘束されていた、やや大きめの乳房がまろび出てきた。
腰の動きと裏腹に優しく揉み、乳首を舌で転がしてやると、喘ぎ声に甘い声音が混じるようになってくる。
「ずいぶんと胸が敏感だな」
「ふあぁん！　恥ずかしい、です……」
「ちゃんと答えろ。こっちでオナニーしてたのか？」
「は、はい！　んんっ！　クリスは、いやらしい子なので、おっぱいでオナニーしていました！　はぁんっ！」
「クリトリスも弄ってただろ。こんなに簡単に剥けやすくなるくらいに」
「ふぁぁぁ……だめぇ！　クリスの、クリちゃん弄っちゃ……ひあぁぁっ！」
血混じりの愛液を塗り付けながら、硬くなった陰核を転がしてやると、クリスは全身を震わせて悶えた。
膣内の動きも、搾り取るような感じに変わってきた。このままいけば、初体験で絶頂させてやれそうだ。
俺もそろそろだな。
乱暴に痛めつけていたチンポの軌道を、クリトリスの裏側と子宮口を往復するものに変える。
少し優しめに快楽に導くように意識して動いてやると、クリスの声はもう完全に発情した雌のものになっていた。
「あ、あぁぁぁっ⁉　ディック様！　ディックさまぁ！　これ以上、したら、いっちゃいますっ！」
「おう、イけよ。初めてのくせに、ガン突きされながら、

下の口でチンポしゃぶってイけよ」
「ふぁぁぁっ!! イきますっ！ イク、イクイクイクイクぅ〜〜〜〜〜〜っ!!」
クリスは仰け反りながら、多幸感に満ちた表情で上ずった嬌声を上げた。心地よい締め付けがチンポを襲う。
俺はパンパンに張った亀頭を震える子宮口に押し付け、無許可で存分に射精した。
精力増大スキルのせいか、普段より射精が長い。たっぷり一週間分は溜めたような量をクリスの子袋に注ぎ込んでやった。
クリスは初めての膣内射精の余韻に浸りながら、恍惚(こうこつ)とした表情で天井を見上げている。
精液を出し切り、俺はぶるりと腰を震わせた。
あー、久しぶりにいい射精だった。
「ふう……中に出したけど、いいよな」
「は……はいぃ……、ディックさま専用のぉ、孕み袋に、いーっぱいザーメン注いでくださって、ありがとうございますぅ……」
なかなか初めてでは出てこないような、気の利いた台詞が聞こえてきた。そういう趣味のエロ本とかオカズにしてそうだな。やはりマゾか。
射精の余韻に浸りながらクリスの美乳を揉む。
よそ見しながらのちょっと乱暴な愛撫だが、彼女は嬉しそうな声を上げている。
俺は意識をステータスの方に向ける。
ログに『処女貫通経験値ボーナス：クリス』『初回膣内射精経験値ボーナス：クリス』『初絶頂経験値ボーナス：クリス』の文字がある。
処女貫通のボーナスが大きかった。
クリスが初物だったのはラッキーだった。おかげで、一回も戦闘していないのにレベルが3に上がっている。取得スキルポイントは1レベルあたり3のようだ。
胸を揉んだりエロい声を聞いているうちに、クリスに入れたままのチンポが再び頭をもたげてきた。
普段より復活が早い。いつもより多めに出たのに。
精力増大はレベル1でも有用そうだ。
「あ……また、ディック様のおチンポが……」
「嫌がっても無駄だぞ。お前は俺のオナホなんだからな」
「いえ、そんな……むしろ、嬉し、ひあぁぁぁんっ！」
今度は最初から遠慮なしにガンガン突いていく。その代わり、精力増大をレベル2に上昇させておく。
意志も余韻も無視して無理矢理オナホ扱いしているのに、クリスは早くも感じ始めていた。
適当に俺自身の快楽のために腰を振っているのに、それ

だけでクリスの敏感な箇所にチンポが当たっているようだ。
射精量や回復力のチェックのために精力増大をレベル2にすると、新しい取得可能スキルが解放された。
スキル名は男根強化。とりあえずレベル1だけ取ってみるか。
「くひっ⁉　あ、ああ……あおっ、おっ、おあぁぁっ！　おふっ、あおっ⁉」
最初の一突きで、クリスはぐるんと白目を剥いた。
嬌声がどこか獣じみた下品なものに変わる。
膣の圧迫感も相対的に増大して、ようやくこなれてきた雌穴を更に無理矢理押し広げる感じがする。
ついでに経験値変換もレベル2にして、セックス一回あたりの効率を良くしておくか。
これで、残りポイントは2だ。
しばらく突いているとクリスは完全にスイッチが入ったようだ。
俺が子宮口を叩くたびに小刻みに痙攣し、膣肉は甘やかに俺のチンポに吸い付いてくる。
愛液が洪水みたいになっていて、一突きするたびに精液と混じり合った汁が音を立てて溢れ、シーツにしみを作る。
クリスは両手両足で俺にしがみつき、意味の分からないうわ言のような喘ぎを上げている。
完全にチンポのことしか考えられないって顔だ。
チンポを最奥にぐりぐりと押し付けて射精する。相手はオナホ奴隷志願のマゾなので、遠慮も許可も必要はない。
二度目なのに、さっきよりもたくさんの精液が狭い子宮口になだれ込もうと噴出していく。
「あ、あおおおっ！　い、イグ……あひぃぃ……熱いの、入ってぐるぅ⁉　お、おっ、おあぁぁぁあああぁぁぁ⁉」
射精を感じたせいか、クリスは俺の腰に絡めた脚に力を入れる。性器同士を押し付けて、強欲に精液を貪ろうとしている。
熱い精液を胎内に感じながら、彼女は再び絶頂したようだった。
クリスの子宮口はフェラチオをするかのようにこくりこくりと俺の子種を嚥下（えんげ）するが、大量の精液が相手では間に合わない。
精力増大レベル2で作られた大量のスペルマはクリスの子宮や膣を満たし、ごぷりと音を立てて膣口から溢れた。
射精の快楽に加えて、小便の快楽に似たすっきり感がある。尿道から粘り気のある液体を大量に吐き出すのは、それだけで気持ちいいのだとよく分かる。
半勃ちになったチンポをクリスから抜くと、彼女の股間から湯気が立った。

むせ返るような雄と雌の性の臭いだ。
ほんの十数分前には受付カウンターに清楚な顔で座っていた人気受付嬢が、今はあられもないポーズで、涎を垂らしてアヘ顔で忘我している。
いい征服感だ。
「どうだった？　精力増大レベル２の方がたくさん出ただろう？」
「あひぃ……」
まともに考えられないような様子だ。もう検証のことも頭になさそうだな。
まあいい。スキルの検証については俺が後で結果を教えてやろう。
「さて、今度は精力増大レベル３の検証をしようと思うが、構わんな？」
「ひゃい……」
精液と愛液、わずかな処女血に濡れたチンポを、クリスの目の前に突き出す。
彼女は蕩けた顔で頷くと、俺のチンポに夢中でむしゃぶりついた。

◇　◇　◇

パンパンと湿った音が宿の一室に響く。
むせ返るような熱気と性臭の中、発情期の雌犬のような嬌声が響く。
クリスは俺の腰の動きに合わせて、夢中でチンポを貪るために腰を振っていた。もはや処女だった頃の恥じらいは欠片もない。
今日何度目だか数えることすら忘れた射精を終え、俺はクリスの腰から手を離した。
彼女は尻を高く突き出したままベッドに崩れ落ち、ビクビクと震える。剥き出しのマ〇コからは、どろりとしたゼリーのような白濁液が垂れ落ちていく。
精力増大を最優先で上昇させたので、現在レベル９だ。
レベル８を超えた辺りから、射精のインターバルを回復力が上回ってしまった。
おかげで、ほぼ底なしだ。連続で注ぎ込んでいるのに、未だにこってり濃厚なのはそのせいだ。
俺は買い置きしてあった飲料水をビンからラッパ飲みし、飲み切れなかった余りをクリスに口移ししてやる。
彼女は嬉しそうに俺の口に吸い付いて舌を絡めてくる。
いや、キスじゃなくて水分補給なんだがな。
「疲れはないけど、腹が減ったな……」
俺は一息ついて、ぽつりと呟いた。

早朝から連続セックスを始めて、気づけば夕方になっている。そりゃあ腹も減るはずだ。クリスだって精液しか口にしてないんだから、栄養が足りないだろう。

そろそろ休憩して飯に行くとするか。

クリスには未確認クラスの調査という名目で一週間ほど有給を取ってもらっている。

今日がその最終日だったので、名残惜しさからたっぷりと愛してやったというわけだ。

しかし、セックスしかやることがないと、自堕落になっていけないな。

いくらティンポ師という戦闘向きじゃないクラスでも、簡単な依頼くらいはこなしておいた方がいいだろう。

「おい、クリス。飯に行くぞ。体を洗って、服を着ろ」

「ふぁ……はい……ごしゅじんしゃまぁ……」

クリスは力の入らない身体にむち打ち、のろのろと起き上がる。

俺は湯沸かし用の魔法道具でタライの水を温め、タオルを用意してやった。

ちなみに、結構高価なこの魔法道具はクリスに持ち込ませたものだ。

賢者だった頃はいくらでも魔法で沸かせたので、こういうアイテムは持っていなかった。

金は余ってるから、買おうと思えば買えるけどな。

俺はクリスに身体を拭かせて一足先に着替えた。

クリスが身支度を整え、精液まみれの雌から美人受付嬢に戻っていく。その様子を楽しみながら、今後の予定をどうするか考えた。

◇　◇　◇

絶え間なくクリスとセックスした結果、俺のティンポ師レベルは10になった。

その過程で『ティンポ師』についてもさまざまなことが分かった。

経験値ボーナスがつくプレイは色々あった。

例えば処女貫通、初回膣内射精、初絶頂、アナル貫通、初回口内射精。

そして同じ女との性交十回目、百回目、千回目でもボーナスがついた。

おそらくそれ以降も十の累乗回目ごとに入るはずだ。

とは言え、一万は時間をかければともかく、十万回目は無理だろうな。

買い出しの時に、実験として適当に市民権のない貧民少女の処女を買ってみた。

初回系、回数系のボーナスは、相手が変わると改めて付与されるようだ。
ついでに初受精でもボーナスがつくことが発覚するというアクシデントもあったが、まあ、多めに金を渡したからいいだろう。
逆説的に言うと、クリスはまだ受精してないということだな。排卵日狙って積極的にヤってみるか。
以上の検証実験から、一人の女に拘るよりも多数の女を相手にした方が経験値効率がいいことが推測できる。
クリスの有給も終わるし、都合のいい女を探しておくことにしよう。
スキルなどの成長はこんな感じになっている。

《ディック・スティッフロッド》
ティンポ師：レベル10　（残りスキルポイント：0）
【所持スキル】
［男の魅力：レベル5］［精力増大：レベル10］
［経験値変換／性：レベル10］［性技習熟：レベル5］
［男根強化：レベル1］［隷属化：レベル1］
【取得可能スキル】
［絶倫］［経験値吸収／性］［精液媚薬化］
［強制発情］［生殖能力強化］［強化儀式／性］
［精力変換］
【所持奴隷】
クリス・トリスクリオス／書記官：レベル24

とりあえず、効率に直結する精力と経験値変換を最優先にしてみた。
男根は強化効率が高すぎるので、痛みを伴うとまずいかと思って1で止めてある。スキル効果をオフにもできると分かったので、杞憂だったけどな。
特筆すべきは、やはり隷属化か。
男の魅力レベル5と性技習熟レベル5でリストに現れた。
レベル10が上限と仮定すると、10人の性奴隷を持つことができるようだ。
新しい女を落とす前に上げても無意味だから、追々上げていくとしよう。
一週間の成果はこんな感じだ。
成長が早いんだか遅いんだか、よく分からんけどな。

◇　◇　◇

高級料理店で食事した後、俺はクリスを人気（ひとけ）のない路地に連れ込んだ。

人気のない路地に引っ張っただけで、彼女は頬を上気させ、脚をもじもじさせている。清楚な受付嬢が、すっかり淫乱になったもんだ。感慨深い。

俺は買ってあった首輪を取り出し、クリスに見せた。

クリスは目を丸くし、目を潤ませた。

「お前に似合うと思って買っておいた」

「ありがとうございます、ご主人様。一生大事にします」

差し出された首輪に焼き付けられたDの刻印を愛しそうに撫でながら、クリスは嬉し涙を流した。

俺はクリスに首輪を巻いてやり、鎖を取り付けた。

やや強めに鎖を引っ張ると、クリスは何の抵抗もなく四つん這いになった。

「お前は俺の大事なペットだからな。俺の方こそ、お前を一生大事に使ってやる」

「ありがとうございます。クリスは幸せ者です」

「尻を向けろ。ペットに相応しい格好で犯してやる」

「はい。ご主人様のおチンポで、クリスの淫乱マ○コを可愛がってください」

前戯なしにもかかわらず、クリスの中は溢れんばかりに潤っていた。押し込んだだけで、ぽたぽたと愛液が地面に垂れる。

「おおおっ、おんっ！　おふぅ……おっ！　あおっ！　お、おっ、おんっ！　あおんっ！」

一瞬で出来上がったクリスは、抑えることも忘れて嬌声を上げる。

まあ、誰かに聞かれても盛りのついた犬だとしか思わないだろうけどな。

鎖を引っ張りながら、好き放題にクリスの中を蹂躙する。彼女もそれに合わせて腰を振り、嬉しそうに上下の口から涎を垂らしてチンポを貪る。首輪が絞まるたびにマ○コも絞まるのが心地いい。

「すっかり淫乱になっちまったな」

「おっ、あっ、はい！　ありがとう、ごじゃいましゅ！」

「だからって、絶対に俺以外に身体を許すなよ」

「あがっ⁉　はいっ！　ごしゅじんさまの、おチンポにっ！　えいえんのっ！　忠誠を、ちかいましゅ！」

「いい子だ」

一際強く腰を打ち付け、すっかり開発され切った子宮を突き上げる。

ぞくぞくと背中を震わせ、彼女が絶頂したのが分かった。ずん、ずん、と押しつぶすように突くたびに、彼女は連続絶頂する。フィーバータイムに入ったな。

「お、おんっ！　あああぁぁぁ！　あおぉぉぉっ！　い、イグぅぅぅ！　ほぁ、あぁぁぁっ⁉」

「クリス、孕めっ！」
「ひゃ……ひゃい‼　あおぁおぁぁぁああぁぁぁっ‼」
俺は命令と同時に、クリスの中に残りの精液を全部出し切るつもりで射精した。
スキルの効果によって、俺は自分の意志で射精量をある程度コントロールできる。その最大値の精液が、クリスの胎内で荒れ狂った。
既に絶頂状態にあったクリスは完全に正気を失い、より深い絶頂に叩き込まれる。
獣そのもののようなイキ声を上げ、恍惚状態で俺の精液を味わう。その顔は涎や鼻水や涙でドロドロで、もはや高級料理店で食事を共にした清楚な女の面影もない。
だが、それがたまらなく可愛かった。
クリスが力なく路地に倒れ臥し、じゅぽっと音を立ててチンポが抜ける。
腹容積換算で三杯分もの精液を噴出した後だというのに、チンポは雄々しく天を衝いていた。精液と愛液に濡れた剛直が、月明かりに照らされて妖しく光る。
「ふう……いいマ○コだったぞ、クリス」
「はあ、はあ……はい、ごしゅじんさまぁ……これからも、ずっとクリスのマ○コをご利用くださいね」
「ああ、約束だ」
鎖を引いて無理矢理身を起こさせ、チンポを突きつける。クリスは苦痛に顔を歪めながら、嬉しそうにチンポを掃除し始めた。
ふと、俺は視線を感じて振り返る。
「し、師匠……？」
そこには、俺の姪にして元弟子、エメリンの姿があった。
俺とエメリンの視線が交錯したのはほんの数秒だった。エメリンははっとして踵を返し、走って去って行く。
マズいところを見られた気がする。
どうにか言い訳を考えておかないと。まさか、ティンポ師のことを姪に言うわけにはいかんよな。
俺が悩んでいるうちに、クリスはお掃除フェラを終えて、ちんちんの姿勢で待っていた。彼女の頭を撫で、人間らしい姿勢になるように命じる。
「帰るぞ。出勤時間までたっぷり可愛がってやる」
「はい、ご主人様」
まあいいか。エメリンのことは、再会するまでに考えておけばいい。
そう思いながら、クリスの胸を揉みつつ宿への道を急ぐことにした。

第二章　賢者の弟子、エメリン

早朝の冒険者ギルドは混雑していた。
俗に依頼ボードと呼ばれている掲示板には人だかりができており、割のいい依頼は張り出された瞬間に奪い合いが発生する有様だ。
俺はそれを遠巻きに見つつ、不人気な依頼を確認した。
ドブさらい。荷運び。魔族領域の定期調査、など。
賢者にとっては魔族領域の調査も悪くなかったが、ティンポ師になった今はちょっと無理だな。
薬草収集とか、低ランク魔物の定期討伐くらいならどうにかなりそうだ。
とは言え金には困っていないから、すぐに依頼を受ける必要もない。不人気依頼でも昼頃には誰かが受けるらしいので、全くもって無理をする意味はない。
依頼ボード以外の掲示物も一通り確認するためにロビーを一周した後、受付がよく見える位置に腰掛けた。
受付には俺の奴隷、クリスがいる。金髪碧眼で、清楚で美人の、ギルド一番人気の受付嬢だ。
冒険者の男たちが色目を使っているが、彼女はその全てをばっさりと無視している。

まさか、あの子の子宮に俺の精液がたっぷり詰まってるなんて、誰も思わないだろうな。
クリスの手が空いたほんのわずかな瞬間に、不意に俺と目が合う。彼女は俺に微笑みかけ、首に巻いたスカーフをずらして首輪を見せた。
実に可愛いペットだ。
落としてから知ったことだが、元々彼女は賢者だった頃の俺を玉の輿の相手として密かに狙っていたらしい。
だから、賢者をやめたと知って相当ガッカリしたそうだ。
結局、一度意識した相手をそうそう嫌いになることができず、ティンポ師スキルのせいもあってあっさり絆（ほだ）されてしまったのだとか。
それも踏まえて、クリスは男の魅力スキルを「加算ではなく乗算」ではないかという仮説を立てていた。
元々意識していればいるほど、スキルの効果は高くなる。
逆に、こちらを全く意識していない相手に対しては、ほとんど効果はない。
実際スキルをオンにして街を歩いても、劇的に発情する女はいなかった。おそらく仮説は正解だろう。
とは言え、ブレイクスルーはある。
貧民を買った時、金貨を見せる前はスキルが無効だった。
しかし、その貧民少女は金貨を積むごとに劇的に発情し

ていった。恋愛感情じゃなくても、何かの方法で好意や興味を惹くことができればスキルは有効なようだ。
「とは言えなあ……全く接点のない相手じゃ、交渉の時点で衛兵を呼ばれかねんよなあ……」
貧民や娼婦相手なら有効な方法かもしれない。
しかし、百回や千回も身体を重ねるつもりなのだから、超美人の処女とか贅沢は言わないまでも、できれば清潔な上玉がいい。
目を閉じて頭を捻っていると、俺の真向かいの席に誰かが座る気配がした。
「師匠。またお会いしましたね」
目を開けると、そこにはエメリンがいた。
昨晩のことがあるので、少し気まずい。
「おう。エメリン。元気でやっているか？」
「お陰様で、脱落者もなく全員生還できました」
「おお、そりゃあ優秀じゃないか。さすがは俺の弟子だ」
「いえ……順調とは言いがたいペースですし、それに師匠の忠告がなければきっと全滅していました」
彼女は暗い顔で俯く。
俺は彼女の頭を撫でようとして、躊躇した。
エメリンはもう一人前だし、子供扱いするべきじゃない。別れ際にもそんなことを気にしていたよな。
そんな葛藤を知ってか知らずか、彼女は俺の真横に座り直す。
彼女はトレードマークの魔女帽子を脱ぐと、俺の肩にしなだれかかった。
「……お願いします。今日は大人扱いよりも、優しくされたい気分です」
「おう、そうか」
俺はエメリンの頭を優しく撫でた。
相当辛い戦いだったのだろう。俺も何度か魔族領域には踏み込んだことがあるので、なんとなく分かる。
「強くなりたいなあ……」
「ボロボロになってもそう思えるやつは、既に充分強いよ。心配しなくても、すぐに望んだ強さが手に入るさ」
「師匠……」
エメリンは帽子で顔を隠し、肩を震わせた。衣服越しに濡れた感触がある。
泣いてる彼女の背を、そっと撫でた。
元師匠とは言っても、今はこのくらいしかできない。なんだか、少し悔しい気分だ。
ひとしきり泣いた後で、ケロッとした様子でエメリンは顔を上げた。目元がまだ少し赤いが、帽子を深く被れば分からないレベルだ。

「すいません。取り乱しました」
「構わんよ。むしろ、まだ頼ってくれるのかと嬉しかったくらいだ」
「それは……まあ、当然ですよ……だって、師匠は今でも最高の師匠ですから……」
ボソボソと恥ずかしい台詞を言って、エメリンは俯く。
困ったやつだ。
確かに俺は最強の賢者だったが、教師としてはあまり優秀じゃなかった。そんな俺を最高の師匠なんて呼ぶやつには、なんでもしてあげたくなる。
しかし、それはそれとして。
昨晩のアレ、気にしていないようでほっとした。あるいは、他人のそら似だと思ってくれたのだろうか。
「偶然でも、また師匠に会えてよかったです」
「おう、俺もお前に会えて嬉しいよ」
「昨日会った時はびっくりしましたが……」
「昨日？」
安心したそばから、実は覚えてるときた。
どうするか、しらばっくれるべきか。
「あの……お相手、受付嬢のクリスさんですよね。まさか、師匠とクリスさんが恋人同士だなんて知らなくて、その、びっくりしました……」
はいアウト。
完全にバレてる。言い逃れしなくてむしろ正解だ。
「まあ、恋人というか、色々あってな……」
「そうですか……」
エメリンは更に深く俯いた。
黒いローブの肩が震えている。杖を握る手に力が籠もりすぎて、指が真っ白になっていた。
あれ、もしかして、泣いてるのか？
「エメリン……」
「ずるい……」
「うん？」
「師匠に会ったの……私の方が、ずっと先なのに……私の方が、師匠のこと……いっぱい好きなのに……」
何も飲んでいないのに咽せた。
ええ、ちょっと、なんだそれ。初耳だぞ。
「エメリン、まあ、あれだ。師匠を……っつーか、おじさんを取られて寂しいのかもしれんが」
「そうじゃないです！」
エメリンは強い口調で俺の言葉を遮り、俺の服を握った。
杖がカランと足元に転がる。
「私、ディックおじさまのこと、男として好きです」
「……そうか。でもな、お前は姉さんの子供だからさ」

「お母さんの子供だから、おじさまに恋しちゃいけないんですか？」
いや、いかんだろ。
そう言いたいが、圧力がすごくて口に出せない。
誰も聞いてないよな、これ。
「エメリン、少し落ち着け」
「落ち着けないです。だって、私、ずっと我慢してたのに、おじさまのこと取られるなんて」
「あー、その、それはな……」
「相手がお仕事の女の人のときや、一晩だけの女の人のときは、我慢できました。本当は私がして欲しかったけど、おじさまが困るからと思って……なのに、会って二週間も経ってない女に取られるなんて……」
エメリンは顔を上げ、クリスを睨んだ。
あかん。その顔はあかん。殺る気か。
今のエメリンは、本気を出せば街一つくらいは簡単に滅ぼせる最強の賢者なのだ。マジで落ち着いてもらわなければ困る。
「待て。全部説明する」
「聞きたくないです」
床に転がっていた杖が彼女の手に音もなく納まる。俺の知る限り最強の攻撃用杖、大魔導師の黒星杖だ。
ダメだ。
ここはなりふり構っていられない。
「エメリン、俺の部屋に来い」
俺はエメリンを抱きしめ、耳元でそう囁いた。男の魅力スキルを全開に解放した状態で。
エメリンは俺の腕の中でびくりと震え、力を失ってもたれかかった。吐く息がねっとりと湿って重い。表情こそ見えないものの、体温の上昇と体の震えで、俺の作戦が成功したのが分かる。
とばっちりでカウンターの中のクリスが倒れた。彼女は他の女性職員に助け起こされ、医務室に運ばれていく。
うん、被害が最小限で済んでよかった。
「お、おじさまぁ……」
「部屋に来いよ。お前が望むなら、とことんまで付き合ってやるから」
「はい……」
エメリンはようやく顔を上げて、俺を蕩けたような目で見つめる。
完全に恋をしている目だ。そして、これ以上ないくらいに発情効果がキマってる目だ。
覚悟を決めよう。
仲間には手を出さないと決めていたが、初めてその誓い

を破ることになりそうだ。どうしてもってときは、姉に百回ブチ殺されても仕方ないことをしなけりゃならない。
俺を最高の師匠と呼んでくれる彼女には、なんでもしてあげたい。その気持ちには、一点の曇りもないのだから。
俺は発情して脱力したエメリンを支えながら、自分の泊まっている宿へ移動した。

◇　◇　◇

エメリンは俺に絡み付くようにしなだれかかり、幸せそうにしていた。そういう方向に仕向けたとは言え、かなり強い期待を抱いている。
この国では叔父と姪でも法律上問題ないが、慣習としては避けた方がいいと言われている。
まあ、法律だ慣習だという前に、姉に本気で殺される危険の方が問題なんだがな。
それと俺の気持ちが問題か。
果たして、家族同然だと思っている姪にそういうことができるのか、未だに分からない。
彼女との接触面に意識を集中させる。
起伏は少ないが、柔らかな少女らしい感触がする。
胸の発育はともかく、幼い頃は病気がちだったエメリンが健康に育ってくれたのは感慨深い。
彼女は姉に似てはいるが、もっと素朴で穏やかな顔をしている。
化粧っ気も飾り気もなく、野暮ったい服装だが、清潔感があって可愛らしい。艶やかな黒髪、日焼けのない白い肌、細く折れそうな肢体。
彼女の澄んだ瞳に目を合わせると、保護欲を誘うおずおずとした視線が返ってくる。
叔父として贔屓目に見ている分を差し引いたとしても、美少女だ。文句なく美少女だ。
こうして密着していると、年頃の娘特有のいい匂いがしてくる。
エメリンの襟元に鼻口を近づけて息を吸い込むと、汗の臭いに混じったかぐわしい体臭が雄の欲望をくすぐる。
「お、おじさまぁ……」
感触、容姿、匂い、甘く掠(かす)れたような声。それらが男の本能を刺激し、俺の分身がもぞりと反応した。
うん。よし。できる。
ちゃんと大事な姪の、大事な弟子の、大事なエメリンの期待に応えることができそうだ。
「着いたぞ」
部屋にエメリンを押し込み、後ろ手に鍵をかけた。

換気はしておいたものの、部屋には昨晩までの行為による男女の匂いが漂っていた。留守中にシーツは取り替えられているようで、少し安心した。
忘れていたが、宿の従業員には多めにチップを渡しておかないとな。
彼女の後ろ姿からは、わずかな怒気が感じられた。
匂いから性行為を想像して、欲情よりも嫉妬の方が強く出たか。
俺はエメリンを後ろから抱きしめた。
普段の家族同士のハグとは違う、女の感触を味わうための抱き方だ。その違いに驚いたのか、彼女の怒りが霧散したのを感じる。
「おじさま……あの、いきなり……」
「何がいきなりだ。そのつもりでついてきたんだろ？」
「は、はい……で、でも、もっとお説教とか、されるかと思ったのに……」
「そのつもりならギルドで説教してるさ。何のために誰にも邪魔されない場所に来たと思う？」
俺はエメリンの腰を押さえつけ、硬くなったチンポで服越しに彼女の尻をなぞる。
彼女はびくりとして身を強ばらせた。
初々しい、可愛い反応だ。顔を見なくても、仕草と呼吸に戸惑いと羞恥を感じる。
「やれやれ。男には気をつけろとあれだけ言ったのにな。こんな簡単に誘いに乗るとは悪い子だ」
「で、でも……おじさまは、おじさまだから……」
「俺だって男だぞ」
ローブの上から成長途上の身体を撫で回してやる。
エメリンの喉奥から、掠れて上ずった吐息が漏れる。
「そして……お前も、女だ」
「あ、あ、あぅ……そこ、ひぁぁ……」
ぐりぐりと、ローブ越しに股間を刺激する。
性技習熟のおかげで、布越しでも的確なポイントを責めることができる。中は余程ぐっしょりと濡れているようで、分厚いローブを通して湿り気が伝わってきた。
指とチンポに挟まれて逃げ場を失くした少女が腕の中で悶える。
その声には、早くも雌特有の媚態が混じっていた。
「漏らしたみたいになってるぞ。お前のことは赤ん坊の頃から知ってるつもりだったのに、いつの間にかすっかり女の身体になっちまったんだなあ」
「え、う……は、はい……」
「ほら。手を出せよ」
俺はズボンのチャックを下げ、ガチガチに反り返ったチ

ンポを取り出した。
躊躇う彼女の手首を捕らえ、脈打つ剛直を握らせる。
「熱い……おっきい……、これ、おじさまの……？」
「最後に一緒に風呂に入ったのは何年前だったかな。その時とは全然違うだろ」
「はい。すごく、硬くて、大きくて、熱くて……こんなの、本当に……」
「入るぞ」
「あぅ……」
「歳は俺のちょうど半分だったか。そのくらいなら、ちゃんと入るようにできてる」
ローブを捲り上げ、彼女の太腿に手を回して持ち上げた。昔と比べると大きくなったが、まだまだ軽い。このくらいなら二時間は支えていられるだろう。
どくどくと脈動するチンポを、割り開いた彼女の脚の間からコンニチハさせる。
エメリンから見ると、グロテスクな肉塊が自分の脚の間から生えているようにも見えるかもしれない。
「あ、ああ……」
「全部だと鳩尾（みぞおち）まで行くか……まあ、今日全部入れるのは無理だな」
「ああ、き、今日は……って……」
「何日も何ヶ月もかけて、俺にぴったりの形にしてやるよ。おじさんはそういうのが好きなんだ。お前が小柄でむしろ嬉しいくらいだから、安心するんだぞ」
「おじさまの、形に……されちゃうんですか……」
微笑んで頬ずりしてやると、エメリンもまたぎこちなく笑った。
小柄なエメリンを持ち上げたまま、フル勃起したチンポを下着越しにゴリゴリと擦り付ける。
もう下着の意味もないくらいぐしょぐしょだ。愛液のぬめりや恥丘の柔らかさがとても心地いい。
「俺の趣味は知ってるだろ？　ほら、宝箱から拾ったばっかりの杖よりも、それを時間かけて俺専用にカスタマイズしたやつの方が好きだったろ？」
「おじさま専用に……」
「エメリンもこれから俺専用にしてやるからな」
自分で言っていて、結構楽しみになってきた。気分がノってきたせいか、背徳感もいいスパイスに感じられる。
エメリンも相変わらず緊張しているが、だんだん流されてきたようだ。元々スキル効果で発情しているし、陥落させるのは簡単そうだ。
チンポで湿った布を苦労して押しのけ、純潔の割れ目に触れさせた。

「あぁ……おじさまのが……」
まだ誰も受け入れたことのない、大事な姪のマ〇コに、俺のチンポがキスしている。意外なことに、罪悪感より喜びの方が勝っていた。
「俺の、なんだ？」
「あ……いえ、なんでもないです……」
「このくらいで恥ずかしがってたら苦労するぞ。自分の言い方で構わないからチンポとマ〇コくらいは言えなきゃ、おねだりするときに困る」
「お、オチンチンと……オ……オマ……」
「オマ〇コ。ここの名前だ」
「ひぅ……あぁぁ……」
腰を振って、反り返ったチンポで穢れのない姪の花びらを擦り上げる。
「チンポはどこに当たってる？」
「お……、おマ〇コに、当たってます……」
「誰の何を、誰のどこに、どうして欲しい？」
「お……おじさまの……おじさまの、おチンチンで、私の、おマ〇コを……あ、あぁ、めちゃくちゃに、して……」
可愛い姪の無垢な舌と唇を、卑猥な言葉で穢したという快感でゾクゾクする。
彼女の要望通り、チンポで幼い淫華を存分に嬲(なぶ)る。
とめどなく溢れてくるエメリンの淫蜜と俺の先走りで、とてもスムーズに動ける。カリで引っ掛けるように陰核を責めたり、時折入りそうな角度で突いたり。
彼女はすぐに甘い声を上げて、俺の動きに身を委ねた。
「ふぁ、あぁぁぁっ！　おじさまぁ！　んっ、そこ……、なんだか、変なの……あぁぁ、おじさまぁっ！」
「ずいぶんと敏感だな。自分で弄ってたのか？」
「ひぁん！　はい！」
「週に何回くらいだ？」
「三回……じゃなくて、んっ、五回……いや、十回……？」
「毎日どころか、日に二回するときもあるのか。ずいぶんとスケベに育ったな」
「ひぁぁ……ご、ごめんなしゃいぃ……私、えっちな弟子で……」
「俺のチンポを想像してたのか？」
「んんっ、そ、それは……ひぅっ⁉」
言い淀むエメリンのクリトリスを執拗に擦り上げる。
勃起した陰核を亀頭が何度も往復すると、彼女はすぐに音を上げた。
「ここに俺のチンポ入れるのを想像してオナニーしてたのか？」
「は、はいっ！　おじさまのオチンチン……おじさまと、

セックスするのを想像して、毎日オナニーしてましたっ！」
「よく言えたな。いい子だ」
エメリンの頬をべろりと舐める。
振り返った彼女の唇に、噛み付くように口づけた。
先週別れ際にしたのとは違う、舌を絡め合って貪り合う大人のキスだ。
口を離すと、彼女は恍惚とした表情で俺を見つめた。
「ふぁ……おじさま……これ、夢じゃないですよね……」
「現実だぞ。ほら、現実のチンポをちゃんと触って、俺も気持ちよくしてくれよ」
本当はマ〇コに擦り付けてるだけでも気持ちいいけどな、というのは伏せてお願いする。
エメリンは従順にチンポに触れ、愛撫し始めた。
亀頭に淫液を塗り付け、裏筋を擦る。
ぎこちない愛撫だが、無垢な弟子にいけないことを教えているという実感で、興奮が高まってくる。
蕩けた花弁の感触に、ほっそりした少女の指の刺激が加わって、射精感が近づいてきた。
エメリンも奉仕の傍ら、貪欲にチンポを自身に押し付け、快楽を味わっている。
「あああぁぁ……おじさまぁ、私、もう、もう……」
「ああ、俺もイクぞ。しっかり受け止めろ」
「ひっ⁉　あああっ、熱いぃ……あぁ、おじさま、イクっ、イきますぅぅ――……っ‼」
エメリンが絶頂し、びくんと仰け反る。
それと同時に、俺は彼女の手の中で欲望をぶちまけた。
大事な姪の指が、俺の精液で穢されていく。
胸に、腹に、太腿に、堅苦しい黒いローブに、そして可愛いピンク色の花弁に、白濁液が飛び散っていた。
「ふぅ……」
「あっ！」
ぶるんとチンポを振ると同時に最後の一滴を絞り出す。
精液は綺麗に彼女の顔に命中した。
彼女は荒く息をつきながら、忘我の表情で自分の手や腹を見下ろしていた。
「こ、これが……おじさまの、あかちゃんの素……」
「舐めてみるか？」
「え……でも、そんな……」
「まあ、無理にとは言わない。今舐められなくとも、そのうち喜んで飲むようになるさ」
俺の調教宣言に、エメリンは背中をぞくりと震わせる。
彼女はしばらく躊躇した後、指についた俺の体液をほんの一口だけ口に運んだ。
「うっ⁉　これが、おじさまの味……変なの……」

「だんだん慣れていけばいいさ」
「はい……」
「それに、今日もっぱら精液を飲ませたいのは、こっちの口の方だからな」
「んんっ！」
絶頂後の敏感になったままのマ〇コに、まだビンビンになったままのチンポを擦り付ける。
こぽりと新たな愛液がこぽれて、チンポに絡み付いた。
「ここに……でも、そしたら、あかちゃんが……」
「孕めよ」
「お、おじさま……」
「俺のこと好きなんだろ？　孕むまでやってやるよ」
「はい……」
エメリンは頬を染め、しっかりと頷いた。
俺は一度彼女を下ろし、いわゆるお姫さま抱っこの姿勢でベッドに運ぶ。
さて、最愛の姪、最愛の弟子を、最愛の恋人にしてやるとしようか。
エメリンをそっとベッドに横たえた。
彼女は夢心地で俺を見上げる。
愛しさがこみ上げてきて、思わずキスをしてしまった。
小さな口腔を、俺の舌が蹂躙する。
反応を観察しながら、舌の裏、歯茎、口蓋などの彼女がくすぐったがる場所を重点的に責めた。
今はくすぐったいだけでも、いずれは俺の舌やチンポに触れると感じるようになるだろう。
エメリンの小さな舌が俺に応える。まだぎこちないが、彼女は懸命に俺を求めてくる。
彼女の唾液を舐めとり、代わりに俺の唾液を流し込んだ。彼女はこくりと喉を鳴らし、口の中のものを嚥下する。
相変わらず、物分かりのいい子だ。
エメリンの柔らかな腹に、はち切れそうなほど勃起したチンポを押し付ける。
「今までは魔法のことばかりだったが、これからはもっと色々なことを教えてやらないとな」
「は、はい……その、頑張って、おじさま好みの女になりますね」
彼女は恥ずかしそうに身悶えしながら承諾した。
その声音には、わずかな期待が混じっている。
軽いボディタッチやキスを織り交ぜながら、エメリンの服を脱がせ、産まれたままの姿にしていく。
彼女もぎこちない手つきで俺の服を脱がす。
反応から性感帯を探るのも忘れない。首筋、脇腹、内股

辺りが弱そうだ。
おっと、靴下は残さないとな。それがマナーってやつだ。
お下げを結んでいたリボンを解くと、緩やかにウェーブした長い黒髪がベッドに広がる。髪型が変わっただけで、ぐっと大人っぽくなった。
「綺麗だ」
ぽつりと呟くと、エメリンは真っ赤になった。
そう、可愛いというよりも、綺麗だ。
俺が気づかないうちに、ずいぶん成長してたんだな。
「あの、おじさま、お世辞なんて……」
「エメリン、頼むから、他の男の前では髪を解かないでくれよ。ライバルが増えるのは困る」
「え、そ、それって、どういう意味ですか？」
「どういう意味かと言われても、ただの独占欲だよ」
動揺するエメリンの耳元で囁く。
「お前は俺だけのものだ。他のやつには渡さん」
「は、はい……」
俺と彼女は産まれたままの姿で抱き合った。
先ほど見つけておいた首筋の性感帯にキスすると、彼女は甘い声で鳴いた。
剛直で無毛の割れ目を弄ると、準備万端と言っていいほどぐっしょり濡れていた。
チンポを入り口に押し付け、エメリンを見つめた。
彼女の淫口は俺を歓迎するようにひくひくと蠢き、中に誘おうとしている。
エメリンが、姪が産まれてから今までの思い出が脳裏に去来する。何とも言えない気持ちで胸が詰まる。
ああ、必ず、この子を幸せにしよう。そう思った。
「エメリン。いいか、入れるぞ」
「あの……おじさま……」
「うん？」
「私、おじさまのことが、ずっと好きでした……ずっと、ずっと、ずっと好きでした……」
「うん。俺もお前のことが好きだ。これまでは姪として、これからは女として」
「おじさま……」
どちらからともなくキスをする。
唇を重ねたまま、腰を突き出した。穢れのない処女肉を押し広げながら、俺のチンポはゆっくりとエメリンの身体に新しい関係を刻み込んでいく。
浅く突き進んだだけで、すぐに抵抗にぶつかった。薄い肉が、俺を拒むように押し返す。
ここを越えてしまえば、もう引き返せない。
彼女の表情に苦痛と不安が滲(にじ)む。

「……エメリン」
「はい……」
「悪趣味だと思うかもしれないが、俺は処女には痛くするのが好きなんだ。初めて繋がった瞬間を、永遠に覚えていて欲しい」
「おじさま……」
エメリンは俺の告白を聞いて柔らかく微笑んだ。まるで、俺を赦すかのように。
「分かりました。おじさまがくれる痛みも、歓びも、全部、ずっとずっと忘れませんから……だから……」
彼女は俺の両の手に、自分の手を絡めてしっかりと握る。
「おじさまのオチンチン、私のおマ〇コに、ちょうだい」
天使のような姪の笑顔は、とてつもない破壊力で俺の理性を粉砕した。
噛み付くように彼女の唇を奪い、はち切れそうなほど勃起した醜悪な肉棒を、少女の無垢な胎内に押し込む。
「ん、んん――――ッ!!」
エメリンは俺に口を塞がれたまま苦痛の呻きを上げた。
彼女は足先までぴんと力を入れ、俺の手を痛いくらいに握り返して耐える。
彼女の膣肉は初めて受け入れる異物を押し戻そうと、ギチギチと俺を締め上げた。

大事な姪の処女血をチンポに感じ、気が狂いそうなほど獣欲が掻き立てられる。俺は破瓜の血と愛液を潤滑液にして、力任せに彼女をこじ開けた。
チンポの半分ほどが大事な姪の中に埋まったところで、行き止まりを示すこりこりとした感触に行き当たる。
俺たちは、とうとう一つになっていた。
ある種の感動が胸に湧き上がってくる。
エメリンが落ち着くまで、俺はそのままの姿勢で待った。
数分ほどして、破瓜の苦痛が和らいだのか、彼女の呼吸も落ち着いてくる。
「おじさま……私、ちゃんと、受け入れられてますか……？」
「ああ、ちゃんと一つになっているよ。お前の一番奥まで、しっかり俺のチンポが入った」
「よかった……嬉しい……」
目に嬉し涙を滲ませるエメリンを抱きしめ、彼女の頭を撫でた。
彼女も俺の背に手を回し、抱き返してくる。
「偉いぞ、よく頑張ったな」
「はい、あぁ……嬉しいです……」
「お前の中は、狭くて、よく濡れていて、チンポに吸い付いてきて、すごく気持ちいいぞ」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/